

第13回

小さな助け合いの物語賞

エッセー
(作文)
募集

誰かを助けた、誰かに助けてもらった記憶…

どちらもあなたの人生を豊かにしたに違いありません。

そんな心温まる感動を、大勢の人にも分けてください。

あなたの文章が心に灯をともし、読んだ人が、

また誰かのために何かをする。

そんな素敵な助け合いの輪が広がるかもしれません。

あなたの心を
温かくしたストーリー
教えてください。



2022年
9月3日(土)必着

選考・発表: 10月21日(金)

協賛 全国信用協同組合連合会・全国信用組合企業年金基金

後援 金融庁・文部科学省・金融広報中央委員会

Shinkumi Bank

信用組合

しんくみ

ちかくにいるから、
チカラになれる。

“しんくみバンク”信用組合は「助け合い」から生まれた金融機関。
この懸賞作文を通じて「助け合い」の心が広まることを願っています。

第13回「小さな助け合いの物語賞」エッセー(作文)募集

テーマ

「誰かに助けてもらったときの感謝の気持ち」、「助けたことで得られた豊かな心」、「助けて何かをしたときの感動」など(家族や友人、同僚など身近な関係での助け合いは対象外となります)、実体験をもとにした「小さな助け合い」がテーマとなります。

文字数

800～1200文字

締切

2022年9月3日(土)必着

応募方法

専用の応募用紙に次の①～⑩をご記入のうえ、作品と併せてご応募ください。

①表題(タイトル) ②氏名(ふりがな) ③郵便番号 ④住所 ⑤電話番号・メールアドレス ⑥年齢 ⑦性別 ⑧当コンクールを知ったきっかけ ⑨職業(または学校名・学年) ⑩エッセー(作文)の文字数
※専用の応募用紙および応募要項については主催者ホームページに掲載しています。

応募宛先

郵送

〒105-7208 東京都港区東新橋1-7-1 夕留メディアタワー 8F
「小さな助け合いの物語賞」応募事務局

メール

tasukeai@shinyokumiai.or.jp
メールタイトルは「助け合い応募」としてください。

賞の種類

しんくみ大賞

最優秀作品
1編/20万円(商品券)

しんくみさずな賞

人と人とのつながり・さずなが感じられる作品
1編/10万円(商品券)

未来応援賞※

青少年を対象に、今後の人生にプラスとなるような助け合いの作品
2編/5万円(図書カード)

ハートウォーミング賞

助け合いから生じる人に対するおもいやり、やさしさを感じられる作品
10編/1万円(商品券)

※未来応援賞は、18歳以下(2023年3月31日時点)に贈られる賞です。

選考・発表

審査結果は10月中に一般社団法人 全国信用組合中央協会のホームページにて入賞者の作品・氏名・学校名を発表します。上位入賞者は10月21日(金)に東京で行われる全国信用組合大会で表彰します。

※新型コロナウイルス感染症の拡大状況により表彰式を中止する場合があります。

注意事項

- 応募作品は自作・未発表の個人作品に限り、連名での応募はご遠慮ください。
- 日本語作品のみが選考対象です。
- 応募作品について著作権侵害の争いが生じても、主催者は一切の責任を負いません。
- 入賞作の一切の権利は主催者に帰属し、主催者が自由に使用できることとします。
- 入賞作は主催者がインターネット上で使用したり、作品集を制作する場合があります。
- 応募に関する個人情報、受賞作品の発表・連絡以外には使用しません。
- 応募作品は返却しません。
- 盗作・二重投稿は固くお断りいたします。左記行為が判明の場合、表彰および賞金の授与を取り消します。
- 選考過程に関するご質問には一切お答えできません。

主催

一般社団法人 全国信用組合中央協会

協賛

全国信用協同組合連合会・全国信用組合企業年金基金

後援

金融庁・文部科学省・金融広報中央委員会

必ず、
応募用紙を
添付してご応募
ください。

一般社団法人
全国信用組合中央協会





未来応援賞

物語をあなたに お届けします。

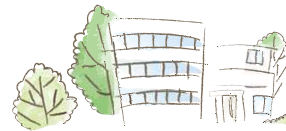


昨年の受賞作品3編をご紹介します。

誰かが誰かを助けた小さな「物語」が、あなたの心を温めてくれたなら、

次はあなたの「物語」を届けてください。

しんくみ大賞



もらったバトンを渡してるだけ

山田 のづみ

人生山あり谷あり、時として地獄に突き落とされるように思う日もあるが、周りに仏さまのような人がいると救われるということをしみじみと実感した。

それから六年後、次男の同級生の母さんが末期がんと告げられた。私は思わず「私もお弁当が作れないときに助けてもらいましたので……」とラインを送った。やっとその時の「恩を返せるときがきたように思ったのだ」。

「いつもおいしいお弁当に息子が大喜びです。おかげさまで体はきついですが、のりこさんの大きな気持ちに包まれていることを感じます。心より感謝しています」とお亡くなりになる十日前にも丁寧なラインをもらった。思えばお別れの二接点だったのかも知れない。

お弁当を作り始めてから二年目を迎えた。学生懇談会などで学校に行くと、何人かのお母さんたちから「今もお弁当作られていますっす、すてきなすね」とか「頭が下がります」といわれることもある。でも私は自分が苦しくて辛かったときにただで救われた思いやりのバトンを次の人に渡しているだけ。大きなことは何もできない、ただお弁当を二つ作るだけ。

今朝も息子と同級生用と同じお弁当を二つ作った私は、こんな難病患者でもできることがあると思うだけで生きている喜びを感じている。こんなさきさきでなくても大きな生きがいとなっているのかもしれない。

え、手があがらない。まぶたもあがらない。ありとあらゆる体の筋肉が自分の言うことをきかない……。突然そんな難病にかかった。それまでお産と歯医者以外ほとんど医者いらずだった私は七年前重症筋無力症と宣告され、ほぼ寝たきり状態になってしまったのだ。

日常の家事は夫や子どもたちがなんとかこなしてくれていたが当時高一だった娘のお弁当作りまでは到底手が回らなかった。当時仲良し四人組でお弁当を食べるのが娘の楽しかったが仕方ない。でも一人ぼっちで学生食堂に行く娘のことを不憫に思ってた。さうした娘の友達のお母さんから突然ラインが届いた。

「お弁当一つ作るのも二つ作るのも一緒に。もしよければお嬢さんの分のお弁当も私に作らせてください」と。思い出すだけで目頭が熱くなる。そんな厚かましいことお願いするものだろうかと思っただけ、いろいろな我慢や苦勞を強いていた娘のことを氣遣ってかしてくださったお言葉。温かいご厚意に甘えさせていただくことにした。そのお友達と理系と文系でクラスが別々になるので、娘は高二からは自分で作ることにしたが、結局三学期の間一日も休まずにおいしい手作りのお弁当をいただくことになった。一生治らない難病とも言われ、何度泣いたことかわからないが、このように親身に私たちを助けてくださったたくさんの善意に支えられて私は数年後元氣を取り戻した。

当たり前の道があるがたい

東京都・藤村女子中学校 原口 理央

私が小学生の時いつも見守ってくれた人がいました。それは通学途中にある、スーパーの駐車場の警備員の方です。私はその方の名前も年齢も知りません。なのにほぼ毎日通学している私を見守ってくれました。

ある日、その方はいつもの場所にいませんでした。次の日もその次の日もいませんでした。その時、私は初めて気づきました。その警備員の方が毎日いてくれたおかげで安心して学校に行っていたのだと。それから一週間が経った日に、その警備員の方が元に戻っていました。その時に私は聞きました。「今までどうしていなかったのですか。」すると警備員の方は「ちょっとがんが見つかっちゃってね。検査入院をしてたんだ。」と言われました。私は何も言わず、今まで通りいってきますと言って通学しました。

次の日、笑顔でおはようと言った後に、警備員の方はありがたうと言いました。そして、「明日からまた入院してがんの治療をするから会えなくなっちゃうんだ。毎朝、君のキラキラな笑顔と元氣な声で元氣をもらっていたんだよ。しばらくは会えないけど、頑張ってるね。私も頑張るから。」と言われ、私から出た言葉は「うん。」の一言だけでした。ありがたうという言葉が返って来ませんでした。

毎日、安心して通学できたのは警備員の方のおかげで、感謝しなければいけないのは私の方なのではないかという気が出ませんでした。そんな後悔が残ったまま、一年と六ヶ月が過ぎたある日、通学をするとき、あの警備員の方がいなくなりました。そこで私は「あの時、ありがたうって言葉なくてごめんない。いつも助けてくれたのは私なんだ。」と言いました。すると、「助けてもらっているのはこっちだよ。君の笑顔を考えてたら勇氣をもらえたんだ。こちらこそありがたう。」と言われ、とてもうれしくなりました。

そして、小学校卒業の日、しっかりと感謝を伝えられました。「今まで支えてくれて、助けてくれてありがたう。」と。私はこの話を通して、助けることで助けられるということが分かりました。今、警備員の方が何をしてくれているのかは分かりませんが、あの時、互いに助け、助けられていたのは間違いないと思います。助け合いをしたことで笑顔が生まれ、その人の人生を変えることができます。助けた人の中には勇氣があることだけれど、助けた経験は次々につながっていく、やがて社会を大きく変えることができるのです。

「助け合い」それは、人生の分岐点、自分ができることを今やろう。

パステースの中の千円

東京都・東京都立北園高等学校 中村 日向子

真夏の夕方、都営三田線日比谷駅。部活の練習が終わった後、私はいつも通りホームで電車が来るのを待っていた。帰宅ラッシュの時間帯と重なり、構内はかなり混雑している。電光掲示板で電車の時間を確認するために周りを見回すと、綺麗なグレイヘアのおばあさんが目に飛び込んできた。不安げにキョロキョロと周りを見渡しながら歩いている姿から一瞬で、この人は困っているのだと分かった。

引込み思案の私は何度か迷った末に、頭の中でシミュレーションを繰り返して「どうかされましかか？お一人ですか？」と思い切った声をかけた。

「夫、おとうさんがいなくてねえ。」おばあさんは不安そうな声で答えた。どうやら旦那さんとはぐれてしまったらしい。「じゃあ一緒に旦那さん探しましょうか。」と言いかけたその時、おばあさんの鞆に赤いカードがついているのに気が付いた。ちよと家庭科の授業でそれについて学んでいた私は、すぐにそれがヘルプカードだということが分かった。

急いでポケットから携帯電話を取り出し、緊急連絡先に電話をかけて事情を話す。電話にでた旦那さんは焦った様子で、「すぐそちらに行きますから」と言った。十五分ほど待つと旦那さんは迎えにやってくる。聞けば、観劇帰りにふたりに歩いていたら、はぐれてしまったそうだった。おばあさんは認知症なのだった。

う。そのおばあさんといえは安心からだろうが、焦っている旦那さんを横目ににこやかな笑みをうかべていた。

「申し訳ない」「ありがたうね」と繰り返す旦那さん。

「いえ、あまりお気になさらないでください。」と言って別れを告げ、やってきた電車に乗ろうとしたとき、

「あ、お嬢ちゃん！」と呼び止められた。振り返ると旦那さんが「これ、貰ってください。」

といながら几帳面に三つ折りになれた千円札をこちらに差し出した。「そんな、ただだけなんです。いいです、いいです」

何度かそう言う私に旦那さんは「お礼をしないんじや、こちらの氣が済まない」と言った。発車のベルが鳴り始めたので、「ではありがたういただきます。大事に使います」と伝えて電車に乗りこんだ。

家に帰りついても私はその千円札を見つめていた。高校生にとつての千円は結構な大金だ。そのうえ引込み思案の私が初めての人の助けで貰ったお金なんでもったなくてどう使えばいいかわからない。しばらく考えた末、もし私が誰かに助けられたら、そのときにあの旦那さんみたくに渡す、お礼の千円にしようと思った。その時が来たらいづつも取りだせるように、今でもその千円札はパステースの中に入っている。